

## 八王子便り (7)

新型コロナ・ウイルス感染のために、「新しい日常」といった言葉を耳にするようになりましたが、皆さまの「新しい日常」はいかがでしょうか。

私のほうは、新学期を迎えて1か月半ほどは自粛、5月末からは、週ごとの授業時間に自宅のパソコンに向かってオンライン講義をし、池袋の古代オリエント博物館には、5月から、週に一度の割合で、出向いています。そのほか、いくつかの研究・教育機関に関わっていますが、オンライン会議が多くなっていますので、一週間のうち、5日ないし6日は自宅研修の日々が続きます。妻と二人の「新しい日常」ともいえましょう。

「新しい日常」では、近くのスーパー・マーケットに同行するさい、都心に出向くさいなどに、マスクを着用するようになりました。子供のころから、風邪を引いても、マスク着用だけは頑強に拒んできましたが、今回ばかりは、拒みきれなくなりました。

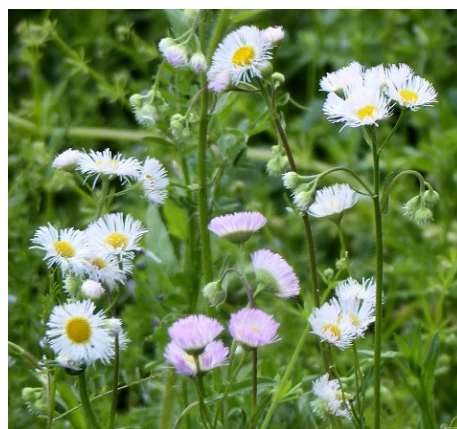
雨天でないかぎり、夕方、小一時間ほどの散歩を日課にしたことも「新しい日常」の一つでしょうか。運動不足の解消を目的としてはじめましたが、いまでは、散歩の楽しみをたっぷり味わっています。林の木々に、空き地や土手の野草に、団地内の住宅の庭に咲く花々に眼を向け、どこからともなく聞こえる小鳥たちの囀りに聞き入りながら、歩いています。7月に入って、自然の草花はめっきり少なくなったとはいえ、眼を凝らせさえすれば、名前を知らない花を見つけることはできます。

数日前には、北野台と名づけられた、私どもの住む団地の端に沿って、一巡りしてみました。そこで「発見」したことが二つあります。

その一つは、空き地や土手のどこにも、ハルシオンが小さな白い花を咲かせていたことです。思い起こせば、この花の名前を記憶にとどめたのは、小学生5年生のときでした。担任の先生が、これはアメリカから来た「帰化」植物であること、アメリカから輸入するメリケン粉の袋にその種がついていたために、はじめは線路わきに広がったこと、などを教えてくださったのです。いまでは廃線になっている近くの信越線の線路端には、ハルシオンがたくさん咲いていました。

それから四半世紀ほど後、大学で聖書ヘブライ語を教えるようになって、ふと、この花の名前が気になりました。ハルシオンはヘブライ語の「シオンの山」に由来するのではないか、と思ったのです。といいますのも、ヘブライ語でハル(har)は「山」を意味しますし、シオンはいうまでもなくエルサレムの別名だったからです。ヘブライ語ではハル・ツイオンとなります。そのことを学生に話しますと、シオンという花もありますよ、と教えられました。そこで、調べてみました。

残念ながら、私の連想はみごとに碎かれました。ハルシオンは春紫苑、れっきとした日本語だったのです。秋口に咲く紫苑(しおん)というキク科



の草花があり（前頁写真）、ハルシオンはそれに似ているけれども、春に咲くので「春紫苑」と呼ばれたとのこと。ハルシオンでなく、ハルジオンと表記されることも知りました。

散歩中、そんなことを思い出しながら、土手のハルシオンに眼を凝らしますと、花の色は白か薄桃色とばかり思っていましたのに、薄紫の花のあることも「発見」しました。

もう一つの「発見」は、私の住む団地がエルサレム旧市街とほぼ同じ広さである、ということでした。団地を一巡りしましたら、万歩計は 5500 歩を示していました。私の歩幅は 70 cm ほどですから、少々崩れた矩形の団地の周囲は 4km 弱ということになります。他方、エルサレム旧市街は、四方をそれぞれ 900m ほどの城壁で囲まれていますから、やはり、周囲は 4 km 弱となるはずです。期せずして、散歩により、そのエルサレム旧市街の広さを身近に実感したという次第です。

エルサレムの旧市街には、ご存知のように、イスラム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒が住み分けています。アルメニア人が南西の一区画を占めていますが、第一次世界大戦時、国際連盟によるパレスチナ委任統治国であった英国がトルコによる大迫害を受けた彼らをエルサレムに受け入れたからでした。アルメニアは、世界で最初にキリスト教を国教とした国でした（301 年）

エルサレムは、これもご存知のように、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教の聖地です。ヘブライ語でイェルシャライム (Y<sup>e</sup>rûšālayim) といいますが、その正確な語源はわかっていません。一般には、「平和(シャローム)の町」と解されてきました。新約聖書ではギリシア語でヒエロソリュマ(Hierosóluma)と綴られることも多く、「聖なる」という意味のヒエロ (hier-) が含まれます。アラビア語ではクドゥス (Quds)、「聖なる場所」という意味です。

もっとも、ダビデが占領した「シオンの要害」(サム下 5:7) は、現在の旧市街の南東端から南に半島のように突き出た部分で、広さも旧市街の 5 分の 1 ほどでした。古くはここがシオンと呼ばれていたようです。

そのエルサレムは、旧約聖書の時代から、幾度となく征服の対象となり、戦場となってきました。であればこそ、エルサレムにおいて、平和を願う人類の知恵が試されている、と行ってよいでしょうか。エルサレムの歴史に触れるたびに、そう学生たちに話してきました。

エルサレムに関して、もう少しばかり。

ダビデによる征服以前から、エルサレムはれっきとした都市国家でした。最も古い記録は、前 19 世紀ころのエジプトの「呪詛文書」です。そこには、聖書に登場するシケムやハツォルなどとともにエルサレムの名がみえます。

次に、前 14 世紀前半、エルサレムの領主アブディ・ヘパからエジプトのファラオに宛てられた書簡が 6 通ほど知られています (EA285-290)。そこから、当時、アブディ・ヘパはシケムやゲゼルの領主たちと対立していたこと、ハビルと呼ばれる集団が各地で掠奪をはたらいていたこと、などがわかります。

旧約聖書では、アブラムを祝福した「サレムの王」のサレム (シャレム) がエルサレムの短縮形です (創 14:18)、ヨシュア記 (10:1) にはエルサレムの王アドニ・ツェデクが登場します。では、ダビデがこのようなエルサレムを征服し、王国の主都としたのは、なぜでしょうか。聖書にその理由は記されませんが、歴史家は二つの理由を想

定してきました。

その一つは、エルサレムの位置と地形です。この町は、当時、エジプトとシリア・メソポタミアを結ぶ海岸平野の主要路（イザ 8：23 の「海の道」）から離れており、三方を深い谷に囲まれ、地形的にも難攻不落の自然の要害であったことです。後に、ユダの町々を征服したアッシリア王センナケリブはこの町だけは征服せずに退却しました（王下 19 章）。ネブカドレツアルもエルサレムを陥落させるのに、あしかけ 3 年かかっています（王下 25：1-2）。ここから、エルサレムを主都に選んだダビデは戦略・戦術に長けていたことがわかります。

もう一つは、この町がイスラエルのどの部族にも属していなかったことです。ダビデはユダ部族のベツレヘム出身でした。そこで、最初はユダ部族に属するヘブロンで七年間、イスラエルを治めました。その後の 33 年間は、どの部族にも属さないエルサレムを主都として、特定の部族に偏らない姿勢を示そうとしたのでしょう。そこに、政治家としてダビデのすぐれた面がみてとれましょう。

しばらく前から、エイラト・マザールという女性考古学者の指揮の下、この「ダビデの町」の発掘調査が続いています。ダビデ時代の大型建造物の痕跡も発見されていますが、宮殿跡などは残っていません。エルサレムは岩盤の丘の上の町ですので、多くの遺跡にみられるように、それ以前の時代の建物の基礎がそのまま残るといことがないのです。それでも、毎年、新しい発見が報告されています。いずれ、聖書会でも紹介させていただきます。

最後に、草花の話に戻ります。日本の「植物学の父」といわれる牧野富太郎のエッセイを読んでいたたら、「八王子便り（5）」で触れたドクダミの記述が間違っていることに気づかされました。ドクダミの「白い十字架」は花卉ではなく、葉が変形した苞（ほう）なのだそうです。しかも、ドクダミの花は、雄蕊（おしべ）の花粉が不完全で、受精しないので、植物学的には、存在意味をもたないことになるのだそうです。

このエッセイ集（『牧野富太郎—なぜ花は匂うか』平凡社）には、次のような文章も載っていました

植物は意味の深き天然物である。この微塵の罪惡も含まぬ天然物を楽しむことから、どれほど吾人の心情を清くかつ貴くするかほとんど量られぬ。……草木を愛するようになれば、これによりて確かに人間の慈愛心を養うことができると信ずる。これ（植物）を……可愛く思うのはすなわち慈愛心の発動である。……大は戦争、小は喧嘩、……思いやりがないから起こる。思いやりの心を養うに、植物は……最も当をえたものであると信ずる。

そして、「思いやりの心」を養うために、今日の学校教育において、植物について教えることをなおざりにしてはならぬ、と力説し、植物に興味を感じずるようになれば、心は高尚になり、邪念はなくなり、身体は健康になる、と勧めています。1936 年、牧野富太郎 74 歳のときの文章です。

こうしたエッセイを読みながら、植物の秘義を次々と明かしていった彼は「造化の秘義」の背後に何を感じ取っていたのだろうか、と思い巡らさざるをえませんでした。

（2020 年 7 月 20 日、月本記）